

【6】

氏名(本籍) ^{よこ}横 ^{やま}山 ^{まなぶ}學 (岡山県)

学位の種類 文学博士

学位記番号 博甲第158号

学位授与年月日 昭和58年3月25日

学位授与の要件 学位規則第5条第1項該当

審査研究科 歴史・人類学研究科 史学専攻

学位論文題目 「琉球使節の研究」

主査 筑波大学教授 芳賀 登

副査 筑波大学助教授 文学博士 熊倉 功夫

副査 筑波大学助教授 岩崎 宏之

副査 筑波大学教授 文学博士 北見 俊夫

副査 筑波大学教授 臼井 勝美

論文の要旨

本論文の構成は以下の通りである。第一章「琉球使節の研究の課題と方法」においては、琉球の歴史的特質を略述し、明治から昭和にかけて展開された三つの論争をとりあげて、沖縄学の機能について、本研究の方法論を展開した。第二章「琉球認識と琉球使節の成立」において、日琉中交渉史と島津の琉球攻めの経緯・琉球使節の成立過程をのべ、その後の使節派遣の基を開いた寛永11年の恩謝使の役割にふれ、その上で近世における琉球使節の基本文献の袋中の著作『琉球神道記』『琉球伝来』および『喜安日記』をとりあげ、日本文化の琉球伝達の意義を論じ、琉球滞在記を通じて、琉球の姿を明らかにした。第三章の「琉球使節の展開」では宝永、正徳期の使節渡来の実態を詳細にのべている。薩摩藩は使節派遣を藩主の官位昇進運動および自藩の立場を幕府に認めさせる機会に利用し、そのため琉球使節を「異国風」と強調した点、又、それが国書問題をひきおこし、これに新井白石が関与し、白石の『南島志』研究を生み、「南倭構想」への展開を検討し、さらに『定西法師伝』『琉球うみすずめ』から当時一般に理解されていた「琉球」像をよみとっている。第四章「琉球認識の展開と琉球使節」は琉球への関心が高揚した天保期の使節渡来の実態を具体的に示し、かつ琉球物刊本を整理検討して、明和以降の「琉球」像を明瞭にした。また琉球への関心をもつ白尾国柱、佐藤成裕、橘南谿、中山信名、伴信友、滝沢馬琴、高井蘭山等の琉球認識を具体的に論じている。とくに薩摩関係者と他の違いを明確にした。第五章「最後の琉球使節—明治五年の使節渡来、

王国から藩へ」は、琉球から派遣された最後の使節について明治政府の意図と使節の経緯を述べ、この使節が琉球の日本国内化に果たした機能を論述している。

資料篇「第一琉球文献構成試論」は、参考論文『江戸期琉球物資料集覧』全四巻をふまえ、近世の日本人が入手し得た琉球に関する知識・情報を把握し、とくに書き手に注目して分類し、それを目録としておさめた。史料の存在が琉球への関心の示し方を明らかにし、分類は史料の存在を明らかにするばかりでなく、書き手と琉球との関係を明確にし、史料群自ら語る琉球文献構成試論を展開する。

資料篇「第二琉球使節渡来資料」は、使節渡来に関する事実を「日程、行程」「使者構成」「献上物・拝領物」「路次楽・城中音楽奏上」「市中御触書」の項目毎にまとめて収め、全年度を通じて使節渡来の実態を明らかにすることにより、年度的な差異とその特質が浮び上ってくる。これは使節渡来の及ぼした影響を探る前提となる基礎作業となっている。

以上によって琉球物等を通じて琉球使節の成立・展開・終焉の経緯と、使節渡来の実態を明らかにしている。その上で琉球使節による琉球認識・琉球観の展開を明らかにし、ほぼ残された文献資料を網羅して結論づけている。

琉球へむけられた関心は、日本における琉球の地位を示し、日本人の琉球認識を示すもので、それが琉球の近さ、遠さを明らかにしている。近代以降の日本における沖縄の地位とどうかかわるかを照射するのに本論は少くとも一定の役割を果たすと考える。

参考論文としての『江戸期琉球物資料集覧』は本論文の文字通り基礎作業であり、未公開の宝玲文庫所蔵の琉球物を紹介した上で、各地に存在する琉球物をこれほどあつめたものはない。おそらく琉球物刊行物四十七点の影印本の集録、翻刻、史料解題、読解、筆者の参考論文等、及び解題参考文献集成は、未収録論文と共に、今後における基礎的文獻に十分なりうるものである。また参考論文2「琉球使節の研究—研究の限界と今後の課題—」は、以上のような研究がどのような研究史上の意義をもち、それがかなりの精密な研究調査にもかかわらず方法的に研究実績の上でどの様な限界をもち今後どのように克服するかについての展望をのべたものであり、自己の今後の課題策定のための仕事を補った。

審 査 の 要 旨

本論文は、琉球物刊行物の調査研究、その蒐集・解題・翻刻等の基礎作業に払った努力とを実証的成果によって、近世琉球研究の基礎研究として、基礎的かつ実証的研究としての意義を高く評価されるべきものである。

琉球物等新資料をつかったの琉球使節の文化的影響を含めた琉球認識・琉球観・琉球関心の増大の事実を示すとの認識は、一つの研究として示唆に富むものといえる。とくに琉球に関心をよせた知識人を例示しての研究も研究史的にはユニークですぐれたものである。

本書が琉球使節の研究として、単に法令（触書等）とか記録のみからその実態に迫ったものでないだけに、その影響面を明らかにしている点は、横山学氏が庶民文化研究への志向をもつことによみ、とくに物そのものを明らかにしようとした点に優れた面をもっている。

琉球物を通じて、資料篇第一でおこなった琉球文献構成論は、野心的ではあるが書誌学的かつ文献論として議論にとどまる。その論旨、および概念設定に多少独自の普遍化をおこたる面があらわれている。また琉球使節の研究という全体論文の構成は、もっと琉球物等にウェイトをおいた構成とした方がより説得的であったのではないか。しかしそれにもかかわらず、この研究論文は、基礎的作業において、他の追従を許さないだけの史料蒐集と整理、解説をもっており、とくに宝玲文庫より得たる琉球物は、はじめて公開され紹介したものだけに、その上同君の努力で紹介された資料発掘の中に、地道な基礎研究の価値は高く評価されるべきものをもっている。

加えて精密な解題は個別的な知識のたしかさを示すに十分であり、先にあげた欠陥を補って余りある実力を備えている。本研究は最近刊行された宮城栄昌の琉球上りの研究よりも遙かに、琉球使節の果した社会的影響のとらえ方においてすぐれ、使節の意味をほり下げていると考える。と同時に今研究はいわゆる琉球研究とくに南島史研究者でも行えない仕事であると共に、沖縄学者といわれる人々の発想とも異なる仕事でもある。その点で学史の上に独自の位置をしめうる。

ただ本研究が従来の歴史研究としては、政策史的側面をかき、その点で不十分さはいなめないが、第一等史料を欠く、研究状況の中で、基礎的な史料面からその閉塞されている状況打破に力を尽した点に大きな意義が認められる。その面で、この努力の方向をより発展されて大成されることを望みたい。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。